



愛郷無限

土屋館
どや
だて 通信

発行者：大曲・花火通り商店街
文責：辻

お問い合わせ：080-1265-7035
tuck-t@akita-tsujiya.jp

2014年03月10日号 NO.460

写真提供：大田市

Subject：あれから3年です。

もう3年も経つのですね。月日の経つのは本当に早いものです。

3月9日の日曜日、3ヶ月ぶりに宮城県名取市のゆりあげ港朝市を訪問してきました。毎週日曜日だけ開催している朝市ですから、311にもっとも近い開催日でした。ここ3週間ほどは記録的な豪雪や暴風のために客足が少々遠のいていたようですが、この日は早朝からたくさんの来場者でたいへん賑わっており、安堵することができました。一方でテレビカメラや取材陣はここ1～2年にくらべめっきり減っている様子。市場内を忙しく走り回る櫻井理事長が実感として語ってくれました。沢山の被害者が出た閑上小学校と中学校の校庭から港までの道路を、様々な人の手書きの絵灯籠でつなぐため、地元の方々や沢山のボランティアの人達の作業をされていました。夜には追悼イベントも開催されるそうです。

朝市の周辺（閑上地区）は全くなにも変わっていない、新しい建物はなにも建っていない状況で、瓦礫が撤去されて以来なにも変わっていません。『ここまで盛り土・かさ上げします』と表示された7～8mはあるであろう巨大な土塁見本だけがそびえ立っています。瓦礫の処理は全て終わっており、5～6階建てのビルの如くそびえ立っていた瓦礫処理工場も解体されて更地になっていました。

NHKで過去何度か名取市の復興策作りの難しさを特集する番組が放映されました。それ以後もまちづくりや防災について考える様々な団体が林立し、意見集約がさらに難しくなっている様子。行政との軋轢・わだかまりも解消できていないそうです。何とか各団体の意向を調整するための場を設け、意見集約して前に進む場所と機会を作ろうと奔走している櫻井理事長ですが、なかなか意見の調整がまとまらぬことに苛立ちを隠せずにおりました。とにかく自分たちの朝市だけでも、名取市の復興の象徴として、そして震災の記憶を忘れ去られぬように、実際に行動して頑張り続けるしかないと改めて語っていました。岸壁には10mのそびえ立つコンクリートの防潮堤が完成していました。まるで要塞のようです。防潮堤の向こう側には海は全く見えません（もっとも311以前も松林で直接海は見えなかったそうですが）

現地に向う度に311が何十万人もの人達にもたらした不幸や苦労、変化を痛感します。3年の節目を目前に、ここ一週間ほどは震災を特集した番組が増えています。当地に於いても、決して無関心にならずに、他人事とは思わずに、ぜひ家族で、仲間が話題にして欲しい。自分たちの地域に同じことが起こったら、自分の身内が被災地に暮らしていたらと考えて欲しい。答えなんて簡単に出るわけはありません。でも考え続けること、感心を持ち続けることは決して止めてはならないことなんだと思います。

無関心ほど恐ろしいことはありません。『都会の無関心』を我々は田舎との比較としてよく使いますが、まちづくりであつたり、公的なこと、地域の将来に関して言えば、都会よりも田舎の方がむしろ無関心な人が多いのではないかと危惧しています。